

本校における第2学年次の新しい試み「医療人特論」について

さんどう まさる

山藤 賢、香取 尚美、檜山 由香里、生江 麻代、谷口 智也、望月 泰男

(昭和医療技術専門学校)

【はじめに】本校では、臨床検査技師になるための国家試験合格はもちろん大きな目的の一つだが、それよりも、社会に出てからの、その学生の成長を後押しすることの方を、学校の理念として大切にしている。そのための2年次の新しい試みについて報告する。

【対象】昨年度の2年生が受講した「医療人特論」の内容紹介と学生の感想を報告材料とさせていただきます。一回3時間（またはそれ以上）の講義を8回行った。

【考察】私達、教育施設が、教育という観点から学生に与えなければならないものは何であろうか。私は常々「一人で生きていく力」と「医療人として必要な心のやさしさ」と述べている。臨地実習を6カ月間行っているのも、そのような意図の一つである。さらにさかのぼって2年次にやらなければならないことも沢山ある。臨床検査技師になるための知識・技術教育はもちろんのこと、社会に出るにあたり(臨地実習に出るにあたり)、人としての強さと感性を磨く教育としてこの講座を始めた。講師は協議会理事長や都臨技会長などの臨床検査技師業界のトップランナーの方々から始まり、本校卒業生、新聞記者、ダジャレの講師（コミュニケーション系コンサルタント）、登山家など多種多様である。その中で、学生は本当に多感な反応を見せた。しかし、この講座もただやれば教育効果があるかと言えば、決してそうではない。なぜこのようなことをしているのか、一回一回の意味合いも含め、事前、事後の講師陣や学生とのディスカッションなども大切である。本校では、学校長を中心に全体でこの取り組みに参加し、最終的には、学生はスピーチ（宣言）を一人一人行い、この講座を終了としている。実はこの講義では、参加していただいた講師陣が、その学生の雰囲気感動し、時間を延長して、長い時間、学生とのディスカッションを繰り返す様子が何度も見られた。私はこの時間をディスカッションではなく、「対話」（ダイアログ）とよび、とても大切な時間と考えている。発表では、学生の感想も含め、この取り組みの様子を報告させていただく。